日本SPF豚協会だより
Report of JAPAN SPF Swine Association 2015.7 第60号

提◆言

徒然なるままに

㈱ファームテック顧問
日本ＳＰＦ豚協会前理事　西原　登

今春、珍問難問と格闘し続けた現役をリタイアしたが、現場を離れて見えてくるものがあり、徒然なるままに述べたい。以前この項で飼育環境について論じ、養豚家は科学者でなければならないということを述べた記憶がある。養豚とは、種（しゅ）・栄養・環境の三要素で成り立っていると信じている。今回は種と栄養（飼料）について私見を申し上げたい。

まず種について、鶏（採卵鶏・ブロイラー）は100%外国種といって過言ではない。日本独自の種はせいぜい地鶏だけであり、もし原種鶏の輸入が２年できなかったら壊滅的な打撃をともなうであろう。

豚についてはこれほど極端ではないものの、品種改良においては外国種が前提となったり、そのままの種を利用したりしている。国内において、国も県も畜産試験場が多く存在しているが、鹿児島黒豚を除けばその作出した種がコマーシャルベースとしてどれだけ利用されているだろうか。かたや民間はそれぞれが独自に行っている。つまり官も民もバラバラであり、これまで要してきた資金と人材は膨大なものであろう。日本の気候・風土・食味にあった種というものを一つのピラミッドとして、官民一体となった研究開発ができないものだろうか。

日本は鶏・豚・牛という畜産だけでなく、穀物においても種というものに無頓着すぎるのではないか。種は一種の重要な防衛産業の一つではないかと思うのは果たして少数意見だろうか。

栄養（飼料）の主たる原料は殆ど輸入で賄っているが、今後は世界人口の増加や気候変動によって量と価格がこれまでのように安定して入手できる保証はない。日本の米は減反政策によって、作らないことに金を使ってきた。世界の殆どの国は農業に相当な補助金を出しているが、それは作った商品に対するものであり、作らないことに対する補助金は日本だけではないだろうか。全く後ろ向きの資金使途ではないか。昨年より国も本腰を挙げてきて、今後５年間で相当量の飼料米の推進を図るようだが、食用米と異なり味を追求しないことから反収も大幅アップする品種改良の促進、さらに二期作の推進と裏作の麦作りによって、耕作地の有効利用と農機具の効率化も可能となる。これにより地下水と環境の保全も図れる。最大の問題は耕作者への価格保証と飼料原料への引渡価格であろう。これまでの農業への補助金を全て投入しても不足かもしれない。しかしながら、環境保全と自給率の向上という大義が、ある程度の税金を投入しても国民を納得させられるかもしれない。

また、この耕畜一体化について農水省だけの管轄ではなく環境省も交えたテーマとすべきではないだろうか。畜産家と耕種農家は同じ農業でありながら、お互いの接点が意外となかった感があり、今後は農業=食糧という命題に消費者も交えた議論が待たれる。

ここ最近諸事情（病気・為替・中国の輸入増・関税の強化等）により、枝肉価格が高水準で推移しており、ある程度の安堵感はあるものの、養豚業としては防疫対策・生産指数の向上・糞尿処理問題・設備投資・人材確保等常に難題と格闘の日々でありましょう。

農業というものは如何なる生産物であれ、世界中どこでも相場によって価格が構成され、生産者の力ではいかんともしがたい面がある。しかしながら、養豚業というものは生産技術指標のレベルを上げ防疫対策を徹底すれば利益のあげられる素晴らしい職業である。

冒頭に掲げた種と栄養と環境にもっともっと思索をめぐらし、関係各位の発展を望むものであります。

今年度の社員(代議員)総会を開催

事業計画、予算案など全ての議案を承認

平成27年度の定時総会（代議員会）は6月11日（木）午後、東京都千代田区のＫＫＲホテル東京において開催されました。昨年度の事業経過報告はじめ同決算および監査報告、代議員および役員の改選、今年度の事業計画および予算案などすべての議案が承認されました。概略は次の通りです（会員の皆さまには議案および議事録をすでにお送りしてあります）。

H26年度事業経過報告

養豚を取り巻く環境は、枝肉相場が昨年度よりも約100円弱高く、経営面で強力な後押しをしました。しかし、一昨年7年ぶりに沖縄県で確認された豚流行性下痢症（ＰＥＤ）は、全国に爆発的に拡大し、協会認定農場においても発生が確認されました。いまなお予断を許さない状況です。

農水省が農場ＨＡＣＣＰの普及推進を唱って実行している農場ＨＡＣＣＰ推進農場の指定は、養豚関係では、３月現在61農場（内ＳＰＦ認定農場４農場）で、農場ＨＡＣＣＰ認証農場の指定は26農場（内ＳＰＦ認定農場４農場）となっています。

このような中、日本ＳＰＦ豚協会はＳＰＦ豚農場認定制度を柱として各事業に取り組みました。認定農場数は182農場（ＧＧＰ・ＧＰ18農場、ＣＭ農場164）、飼養母豚数は80,186頭（1,416頭増）となり、農場数は横ばいながら、飼養頭数が増加、再び８万頭の大台となりました。

ＣＭ農場の生産成績をみると、一貫経営農場では１母豚当たり年間出荷頭数が平均21.9頭（前年度21.5頭：全国平均19頭弱）と若干増加しましたが、Ａ薬品費（抗菌性物質）は185円（全国平均は900円弱）で、ここ数年来増加傾向にあります。農場飼料要求率は3.20（前年度3.24）でした。繁殖-Ⅱ農場では１母豚あたり年間出荷子豚頭数が22.67頭（前年度23.03頭）と若干減少し、Ａ薬品費も120円と増加しました。肥育-Ⅱ農場は前年度とほぼ同様でした（註：協会だより59号参照）。

ＳＰＦ豚の普及活動として、10月に川崎市で開催された「ちくさんフードフェア」（２日間、来場者13万人以上）で、ＳＰＦポークの試食（しゃぶしゃぶ計40kg以上提供）、アンケート調査（計2,000枚）及びパネル展示などを実施しました。

11月にはＳＰＦ豚セミナーを開催し、130名のご参加をいただきました。

利用促進をお願いした認定シールの販売は500万枚強にとどまり、前年比80％と大幅に減少しました。協会オリジナルキャップとＴシャツの販売、およびポークリーフレットの配布も継続しています。ポークリーフレットは増刷（一部改訂）も行いました。

協会だよりは予定通り55号、56号、57号、58号を発行いたしました。

また、地域研修会はＰＥＤ発生の状況をふまえて検討の結果、中止といたしました。

代議員・役員の改選

今年度は代議員および役員の改選期にあたります。第３期代議員および役員は次の方々です（順不同、敬称略）。

＜地域選出＞山中茂樹（再任、㈲山中畜産）、日浅文男（再任、理事、㈲道南アグロ）、布施久（新任、㈲ふなばやし農産）、渡辺和宏（再任、㈲ケイアイファウム）、飯田恭久（就任、監事、全農畜産サービス㈱東日本原種豚場）、高橋充好（再任、㈲胆沢養豚）、石川輝芳（再任、理事、(農)しわひめスワイン）、細谷浩（再任、㈲ほそや）、矢吹和人（新任、㈲常陸牧場）、林寛康（再任、理事、㈱林商店）、下山正大（再任、理事、㈲下山農場）、綱島良信（新任、綱島良信養豚場）、高木敏行（再任、㈲東海ファーム）、澤村賢治（新任、長野県農協直販㈱

ＳＰＦ種豚センター）、小椋和典（再任、理事、㈱西日本ジェイエイ畜産）、川島力（再任、監事、㈱ユキザワ）、林洋一（新任、ＪＡ北九州ファーム㈱）、平芳紘（再任、㈲芳寿牧場）、高森省吾（再任、㈲高森農場）、松本伸一（新任、理事、㈱ファームテック）

＜ピラミッド選出、理事＞北島克好（全農畜産サービス㈱）、鈴木保（㈱シムコ）、秦政弘（㈱サンエスブリーディング）、上野啓介（伊藤忠飼料㈱）、清澤博明（ホクレン）、大関輝男（日本農産工業㈱）

＜会員外理事＞藤田世秀（協会）

H27年度事業計画

ＳＰＦ豚農場認定制度の見直し

認定制度がスタートしてから20年以上経過し、当初とは養豚現場も疾病等の状況も大きく変化しています。制度そのものが現状に対応できているのか、検討する必要性も出てきました。平成25年度に疾病および生産成績ワーキンググループを立ち上げましたが、それとは別に、認定規則の見直し・改定について検討を開始、正副会長会議等で素案を作成していきます。両ワーキンググループでの検討も継続事業とします。

ＳＰＦ豚農場認定事業の推進

引き続き、ＳＰＦ豚農場認定規則・防疫設備・管理基準・細則に基づく運用を徹底します。認定委員会は6、9、12、3月の計4回開催します。

認定成績集計結果のフィードバック

引き続きＳＰＦ豚農場認定申請にともなって提出される生産成績を集計して、認定証発行時にこれまでの成績の推移を、また年度末に、各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックします。ベンチマーキングに活用して農場成績の改善に役立ててもらいます。地域研修会等での活用も検討します。

生産成績優秀ＣＭ農場の表彰制度の継続

例年通り、生産成績優秀ＣＭ農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。新たな表彰の対象項目についても検討を加えていきます。

また、10年以上連続して上位25％の成績をキープした農場の認定証発行について、その旨を顕彰する優秀マーク等の貼付を検討します。

ピラミッド会議の開催

円滑な事業推進のため、ピラミッド会議を開催します。昨年度十分に実行できなかった生産成績低迷ＣＭ農場の改善策、非認定ＳＰＦ豚農場実態調査などについて検討していきます。

ＳＰＦ豚セミナーの開催

開催日時、会場、テーマなどピラミッド会議で検討します。

地域研修会と技術懇談会の開催

地域研修会を引き続き開催します。日時、場所、テーマ等については前回のテーマをもとにピラミッド会議で検討します。開催地域の優秀農場を中心にした技術情報交換会もあわせて検討します。また、技術懇談会の開催を検討します。

協会だよりの発行

協会だより59号（４月）、60号（７月）、61号（10月）、62号（１月）を発行します。会員へのインタビュー、ＳＰＦポーク販売の取り組みなど、引き続き積極的に取り上げます。

販促用資材の制作と普及

店頭用ポークリーフレット、協会パンフレットを引き続き希望会員に無料で配布します。さらに、認定農場向け協会オリジナルキャップとＴシャツのデザインを見直しも含め販売を継続します。

ＳＰＦポークに対する正しい知識の普及

「ちくさんフードフェア」等のイベントへの参加、ＳＰＦポーク販売店情報の収集・整備、試食会の開催などを実施・検討し、ＳＰＦポークに対する正しい知識の普及に努めます。

引き続き認定シールの利用しやすい運用方法を検討します。認定農場に対しプライベートシールへの認定マーク刷り込みをお願いしていきます。

ＳＰＦ豚をわかりやすく紹介するパネルなどの資材や、協会だよりに掲載中のＳＰＦポークレシピをまとめたレシピ本またはレシピカードの作成を検討し、ＳＰＦポークのＰＲに活用します。

会員相互の情報交換ツールの活用

会員限定メーリングリストをもとにメールの一括送受信によるメンバー全員の情報交換の場（掲示板）を設置、活用します。

◆連 載No.5◆
豚のウイルス病

ウイルス性下痢症①

(独)農研機構 動物衛生研究所
ウイルス・疫学研究領域　宮﨑　綾子

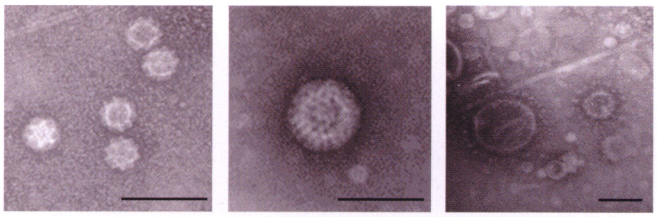
はじめに

昨年の豚流行性下痢（PED）の流行により、ウイルス性の下痢に対する関心が世界的に高まってきました。下痢は農場でよく観察されますが、その発生形態は様々です。伝染性胃腸炎（TGE）やPEDのように豚舎全体へ伝播し甚大な被害を及ぼすもの、分娩舎で散発するもの、あるいは離乳後下痢として常在し生産効率を下げるものもあります。散発性や常在性の下痢でウイルスに注意することは少ないと思いますが、研究では多様なウイルスが確認されています（図）。そこで、今回から、TGEとPEDを始めとするウイルス性下痢について解説したいと思います。

下痢に関与するウイルスは多種多様

表に、近年国内外の豚の下痢便で検出されている主なウイルスとその発生形態や好発日齢を示しました。TGEウイルスやPEDウイルス、ロタウイルスについては次号以降に解説しますので、本稿ではやや耳なじみのない、それ以外のウイルスについて説明したいと思います。

豚デルタコロナウイルス（以降デルタコロナV）は、2012年に発見された新しい豚のコロナウイルスです。米国におけるPEDの流行の中で、PEDとTGEが否定された下痢症例で検出されたことから下痢との関連が明らかになってきました。国内でもPED様の発生例からデルタコロナVが検出されています。感染実験ではTGEやPEDと同様に下痢が観察されたものの、死亡例は確認されていません。デルタコロナVの農場内における詳細な動態は不明であり、今後の調査が必要です。



図．子豚の下痢便中に観察されたウイルス様粒子の電子顕微鏡像。サポウイルス様粒子（左）、ロタウイルス様粒子（中央）、コロナウイルス様粒子（右）。各図中のバーは100nm。

豚レオウイルス（以降レオV）には３つの血清型があり、米国でPEDの流行に付随し、下痢便から血清型３のレオVの検出が報告されています。米国分離株を用いた感染実験では下痢や体重減少、元気消失が確認されたものの、こちらも死亡例は確認されていません。レオVは国内にも広く浸潤しており、その感染時期は移行抗体の消失する２ヵ月齢前後と考えられています。豚サポウイルス（以降サポV、図左）と豚アストロウイルス（以降アストロV）は共に小型球形のウイルスで、国内外において哺乳豚や離乳豚の散発的から常在的下痢に関連して検出されています。実験感染において死亡例は確認されておらず、単独感染での致死率は低いと考えられています。両ウイルスともに幅広い日齢の豚の糞便で検出されることから、農場に広く常在していると考えられます。また、下痢便から頻繁に遺伝子が検出され、下痢との関連が疑われている豚コブウイルスと豚トロウイルスについては、今後の感染実験による病原性確認が待たれます。これらの常在性ウイルス単独感染での被害は大きくないと考えられていますが、病原性大腸菌などとの混合感染により病態が悪化します。散発性や常在性の下痢に対してもウイルスの関与を疑ってみてください。

（以下次号）

表　豚の下痢便から検出されるウイルスとその発生様式、致死率、好発日齢と感染実験での病原性

	エンベロープの有無	発生様式	致死率	好発日齢				感染実験での病原性
				哺乳豚	離乳豚	肥育豚	成豚	
豚流行性下痢ウイルス	＋	常在～流行	若齢豚で時に100% その後は低下	○	○	○	○	重度の水様性下痢～軟便、嘔吐、脱水、削痩
伝染性胃腸炎ウイルス	＋	常在～流行	若齢豚で時に100% その後は低下 常在型では0～20%	○	○	○	○	重度の水様性下痢～軟便、嘔吐、脱水、削痩
豚デルタコロナウイルス	＋	流行？	不明	○	○	○	○	水様性下痢、嘔吐、間質性肺炎
豚ロタウイルス	－	常在～流行	0～20%	○	○	－	－	水様性下痢～軟便、嘔吐、脱水、削痩
豚サポウイルス	－	常在	ごく低い	○	○	－	－	軽度の下痢
豚アストロウイルス	－	常在	ごく低い	○	○	－	－	軽度の下痢
豚レオウイルス	－	常在	ごく低い	○	○	－	－	軽度の下痢、体重減少
豚コブウイルス	－	常在	不明	○	○	－	－	未実施
豚トロウイルス	＋	常在	不明	○	○	－	－	未実施

連　載　豚舎の害獣対策・害虫対策・消毒などのポイント⑯

トレイルカメラを使って野生動物を知る

岐阜大学応用生物科学部特任助教　森部　絢嗣

豚舎には様々な獣たちが集まってきます。運がよければ、日中でも目撃することがあるかもしれませんが、多くの野生獣類は、人間を恐れて夜間に活動するのでなかなか直接目撃できません。そのため、通常、野生獣類の存在を知るには、糞や食痕、足跡などを見つけて、種判別をする必要があります。しかし一般の方では、これらの情報から正しい種類や数、出没頻度などを把握するには困難です。時にはそのような曖昧な状況下で獣害対策を強いられることがあります。

そこで誰でも野生獣類を観察できる道具として、トレイルカメラがあります（写真1）。トレイルカメラは、別名 自動撮影カメラまたはセンサーカメラとも呼ばれています。仕組みは、カメラ前面の赤外線センサーが動物を感知するとSDカードに静止画や動画を撮影時間とともに記録します。赤外線LEDのライトで照射するタイプの機種は、暗闇でも動物にほとんど気づかれずに撮影できます。特に同じ「No-Glow Black LED」タイプは、ニホンジカに気づかれることがほとんどなく、警戒されにくい仕様になっています。

写真1

写真2

トレイルカメラは近年、さまざまなメーカーから発売されています。その多くはアメリカのメーカーが設計した中国製です。

安いものは1万円前後で購入できますが、防水性や耐久性に問題があります。カメラの品質は、3万円ぐらいから良くなる傾向にあります。数々のトレイルカメラの中でも株式会社ハイク社（http://hyke-store.com/）が扱っているハイクカム（写真1：http://hyke-store.com/?pid=86199834）は、日本語表記の設定画面で価格と性能のバランスが取れている商品です。携帯の3G回線を用いたタイプ（写真2）も販売されており、価格は高くなりますがこちらはトレイルカメラが撮影した写真を携帯やパソコンで受信できます。そのため、リアルタイムに動物の侵入を確認できます。

写真3

このようなトレイルカメラをある山中の酪農家の敷地内に設置したところ、イノシシの大群が撮れました（写真3）。写真には写っていませんが、全部で母親3頭とウリボウ（イノシシの子供）21頭を確認できました。この群れの狙いは、畜舎から漏出した配合飼料です。ここはイノシシにとって最高のレストランになっていました。しかも栄養価の高い飼料を摂取していたため、通常の野生イノシシの産仔数が4～5頭であるのに対し、この農場に出没していた3頭の母親の産仔数は、9頭、7頭、5頭でした。もちろん農家はイノシシが来ていることは知っていますが、畜舎内に侵入するわけではなく、実害がないため、特に対策を施していませんでした。

このような森林と隣接するほとんどの農場でイノシシなどの野生獣類の出没を確認できます。イノシシの侵入防止については、前号で文献が紹介されているので、それらを参考にすれば、ほぼ完ぺきに遮断が可能です。しかし、資金的に余裕のない農場は防護柵の設置ができません。その場合、野生動物の餌となる飼料や堆肥等が野外にでないようにしっかりと管理し、野生動物を誘引しないことが重要です。

紹介●ＳＰＦのお店24

清見台サンロク

千葉県木更津市清見台東1-12-16 TEL/FAX.0438-98-2929
http://sanroku36.com

今回ご紹介するお店は前号の「ＳＰＦのひと」に登場いただいた平野賢治さんご夫妻の出会いの場所、千葉県木更津市駅から車で10分ほど、住宅街の中にあるすてきな隠れ家レストランです。

オーナーシェフの市川正秀さんは、お父さんが38年前始めたお店を15年前引き継ぎました。「サンロク」という店名の由来ははお父さんの趣味が山登りで「山から下りてきた人がホッとできる山麓のようなお店に」との思いからだそうです。特に宣伝もしていないそうですが、その雰囲気とおいしさが口コミで広がり、平野さんを含め今までに15組ほどのカップルが誕生している「結びの神」的場所となったようです。

オーナーシェフの市川正秀さん(中)とスタッフ

店内のおすすめメニューにも林ＳＰＦの文字

ＳＰＦ豚との出会いは市川さんの奥さん、奈生さんと平野さんが飲み友だちで、「賢ちゃんの作ってる豚肉を食べてみたいね」というのがきっかけでした。実際に平野ＳＰＦ豚農場産「林ＳＰＦ」を使ってみてそのおいしさにびっくり、ＳＰＦ豚について改めて勉強したそうです。「一番の特長は脂が甘く、くどくないこと。保水性も抜群です。丹精込めて生産された豚肉をどこまでおいしくできるか、をいつも考えて料理していますが、その素材のおいしさに追い付いていないかもしれません」というほどの惚れ込みようです。「満足極まる豚肉ですね」とは生産者名利に尽きるお言葉。シェフご自慢の豚肉メニューは一押しのローストポークはじめ、どれもさすがのおいしさでした。アクセスのいい木更津市、どんな高級レストランにも負けない美味しい豚肉料理がリーズナブルに味わえます。何かの折にぜひ一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

店内には可愛い豚の置き物も

シェフ自慢のローストポーク

●協会からのお知らせ●

●ＳＰＦポークリーフレット増刷しました

ＳＰＦポークリーフレットの最新版（写真、Ａ５判見開き４ページ、一部改訂）が完成しております。認定農場およびＳＰＦポーク取り扱い店などには無料で差し上げております。販促資材としてご活用下さい。ご希望の方は協会事務局（TEL.０３－５８３５－５３７５）までお問い合わせください。

●ＳＰＦポークのお店をご紹介ください

本ページでも掲載しておりますが、協会だよりでは全国の会員などの直売所、認定農場産ＳＰＦポークにこだわる精肉店や小売店、レストランなどの飲食店を随時掲載、ご紹介しています。編集部がどこにでも取材にうかがいますので、ご存知のところ、掲載したいお店などがありましたらぜひご紹介ください。協会事務局までご連絡をお願いします。皆さまからの情報提供、お待ちしております。

ＳＰＦ豚ロースのステーキ～野沢菜ソース～

●レシピ提供・「和顔 本館 鶏魚楼（けいぎょろう）」料理長　富樫　芳喜（北海道札幌市）

今回のレシピはポークステーキと野沢菜漬けという意外な組合わせがポイント。ソースにバターとたまり醤油を使うところが絶妙なバランスを生む、和テイストながらしっかりとした味の逸品です。

●材料●（2人分）

ＳＰＦ豚ローススライス肉（少し厚めのもの）3枚
レタス　2枚
ミニトマト
塩・こしょう　少々
サラダ油　適宜

＜ソース＞
野沢菜漬け　50g
たまり醤油　20cc
酒　20cc
みりん　20cc
バター　20cc

●つくり方●

① ロース肉に塩・こしょうをふります。野沢菜漬けは2センチほどに刻みます。
② フライパンを熱しサラダ油入れて、①の両面を焼きます。
③ ソースを作ります。酒とみりんを鍋に入れて煮切ります（アルコールをとばします）。たまり醤油、野沢菜漬けと合わせ、最後にバターを入れてよく混ぜます。
④ 器にレタスを敷き②を盛り付けてミニトマトをかざり、ソースをかけたら出来上がりです。

【富樫シェフからのアドバイス】
強火で焼くと肉がかたくなりやすいので、ゆっくりと火を通してください。
ソースのバターはお好みで増やしてもいいです。他の調味料も味を見ながら調整してください。

●認定情報●

●平成27年度認定農場

[6月認定]（有効期間：平成27年6月4日から28年6月30日まで）

北海道・ホクレン養豚技術センター、㈲鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム㈱、㈲ゲズント農場、㈲フロイデ農場、**岩手県**・ＦＶファーム、**秋田県**・ＪＡ秋田しんせい肥育豚農場、**福島県**・㈲東和牧場、**茨城県**・㈲弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、㈲篠崎畜産、**群馬県**・ＪＡ東日本くみあい飼料㈱利根スワインセンター、**千葉県**・江波戸ＳＰＦ農場、高橋幸雄養豚、㈲ピギー・ジョイ第１農場、木内養豚第１農場、同第２農場、石毛宏司養豚、塚本利昭養豚場、宮澤光男養豚場、㈱林商店、吉田道養豚場、**鳥取県**・㈱西日本ジェイエイ畜産名和農場、**岡山県**・岡山ＪＡ畜産㈱荒戸山ＳＰＦ農場、**愛媛県**・冨永養豚、㈱多田ファーム、ＪＡ西日本くみあい飼料㈱愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、**佐賀県**・ＪＡさが富士天山ファーム、**長崎県**・㈲伊藤ファーム、浜田養豚、ＪＡ全農長崎県本部五島種豚供給センター、**宮崎県**・㈲レクスト、江夏商事㈱御池農場、クリーンファーム㈱、江夏商事㈱川南農場、**鹿児島県**・㈱かいたく大口農場、鹿児島いずみ畜産㈱三笠農場、㈲さつま農場

（以上41農場）

※次回認定委員会は平成27年9月10日（木）の予定

SPFのひと

㈱ユキザワ

川島　力（つとむ）さん

●東京都江東区

ぶれない姿勢と経験が農場を引っ張る原動力

今号の「ひと」はサラリーマン社長（!?）の登場です。ＳＰＦ認定農場４農場からなる㈱ユキザワの総責任者が川島さんです。

川島さんは京都のご出身。有名な下鴨神社のすぐ裏で高校まで過ごしました。お父様は京都大学の教授で、畜産を学んだ人ならその著書を知らない人はいないという家畜栄養学の権威、故川島良治先生。ご本人もさすが知的でダンディな雰囲気ですが、立派すぎる父親でご子息としてはさぞ大変だったのでは？「わかるでしょう（笑）」。

で、大学進学は北海道へ。「遠くに行きたかったんですよ」といいつつ選んだのは畜産専門の学校。お父様の影響が？「なかったとは言えませんねえ」。卒業後就職した飼料会社が翌年合併、伊藤忠飼料㈱が誕生しました。

研究所勤務を経て名古屋、本社、南九州、関東、東北と文字どおり全国を駆け回りました。そのほとんどが単身赴任、２人の男の子の子育ては名古屋時代に職場結婚した奥様に任せっぱなしだったようです。

初めての出向先が㈱ユキザワ玉川農場（福島県玉川村）。場長就任前に現場勤務となりますが「やってよかった。豚のことがわかりましたから。現場を知ってることは経営する際の強みになります」。

そして場長として遭遇したのが2011年の東日本大震災。協会セミナーのパネルディスカッションでもその時の経験を報告いただきましたが、「最初は何をやっていいかわからなかったが、幸い停電もなく思ったよりはましだったのかな。一番苦労したのは飼料、水、燃料、とくにガソリンの確保でしたね」。農場復旧してからも福島ならではの風評被害にも悩まされたそうです。

現在は秋田・福島・愛媛にある４農場（雪沢農場、玉川農場、丹原農場、大川農場）の責任者として、コンプライアンス対策や肉豚販売先の安定化などに取り組んでいます。「事業を見直しながら、地道に。一つ一つ解決の方向に向かってます」。

現在は縁あって自宅を構えた千葉県市川市の自宅から通勤する毎日ですが、出張も多くお子さんたちも独立、奥様もお仕事があって「単身赴任生活とあんまり変わりませんよ（笑）」。趣味は高校まで水泳部だった経験を活かしたプール通い。メタボとは無縁なスリムな体型を維持されています。

京都人らしい芯の強さとぶれない姿勢が、会社を引っ張る原動力ではないかと拝察しました。（編集部）

編集後記　ＰＥＤが下火となり、枝肉相場は高止まりとあって、安心してはいませんか？こんな時こそ経営の根底を見直すチャンスです。バイオセキュリティーを意識した環境整備、繁殖成績向上のための種豚更新、農場飼料要求率の改善、使用薬品の思い切った見直しなど、余裕があるからこそできることがあります。特に環境整備について、協会では５年に１度、各認定農場の防疫設備状況を調査しています。次回は来年度です。改善などの指摘を受ける前に、今から点検、補修を終わらせておいてください。（世）

日本ＳＰＦ豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会 の

登録商標です

日本SPF豚協会だより

第60号　2015年7月1日発行（季刊）

発　行　一般社団法人 日本ＳＰＦ豚協会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375　FAX.03-5835-5376
e-mail：j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人　北島　克好

編集人　藤田　世秀